

*The Remains of the Day*における否定のテキスト分析: 語り手の内面を理解するために

平 野 牧 子

A textual analysis of negation in *The Remains of the Day*: for understanding its narrator's private sentiments

Makiko Hirano

抄 録

小説を読む行為は、テキストからメッセージを受け取るという意味において、人のコミュニケーションと類似している。いずれも、テキストや談話に、社会文化的コンテキストを重ね、メッセージを読み解くのである。本稿では、小説 *The Remains of the Day* の語りにおける否定表現を分析し、語り手の態度を確認する。否定には、その語用論的特性がゆえに、コントラストを際立たせたり、婉曲に伝えたりする機能があり、英国執事である語り手が選好することが予想される。考察の結果、2つの大戦を経た社会転換の渦中にある語り手が否定表現を用いて、懐古の情や現状への不満などを婉曲に伝えていることが確認された。

キーワード: 否定、語用論、テキスト分析、小説、*The Remains of the Day*

(2021年9月21日受理)

Abstract

Reading novels is similar to communication among people in that the purpose of both is to receive the message from the text or discourse: people, in either act, infer the message by referring to the sociocultural context of the text or discourse. This paper examines negations in the narrative of *The Remains of the Day* to see how they reflect the narrator's attitude. Negation has its unique pragmatic properties which enable it to function as contrast and euphemism. Being a British butler, the narrator is expected to prefer negation which has these functions. The results indicate that the narrator who is in the midst of the significant social changes after the two world wars convey euphemistically his nostalgia for the past and frustration about the present with negation.

Keywords: negation, pragmatics, textual analysis, novels, *The Remains of the Day*

(Received September 21, 2021)

1. はじめに

現代社会においては効率が求められ、迅速かつ明瞭であることが優先される。しかし、社会を構成するのは、異なる社会文化的背景をもつ人間であり、異なる価値観を持つ他者の行動や言動を理解するためには、それらを手がかりとして、その背景を考察することが不可欠である。サザーランド(2020:14)が、「[...] 最高の文学は決して物事を単純化せず、複雑な世界を受け入れられるように、心と感受性を広げてくれる——たとえ読んでいる世界に必ずしも同意できなくても(そういう場合が多い)」と述べるように、物事を単純化する傾向にある現代社会だからこそ、複雑な社会の理解に努める上で、文学が果たす役割は大きいと思われる。

本稿では、小説 *The Remains of the Day*¹ (Ishiguro, 1989, 2005) の語り手を理解するための一つの方法として、語りにおける否定表現に着目したテキスト分析を行う。

本小説の語り手である英国執事が回想するのは、英国の貴族社会が2つの大戦のはざまに衰退し、変化を余儀なくされる時代である。社会変化にともなう身の回りの出来事を、否定を用いて伝える時、その言語形式は語り手の考えや価値観を表していると考えられる。本稿では分析対象を、社会文化的背景に関わる語りに表れる、明示的否定辞 not と never による述語否定²とし、テキストの分析にあたっては、小説内の社会文化的背景と、否定の語用論的特性および機能を参照する。

2. 小説の「読み」——テキスト分析

小説は、その作者が何らかの意図をもって創造したものであり、作者にとっての読みは、自身の意図に則したものに限定されるかもしれない。しかし、読者にとっての読みは、土田他(1996:65)が、「作品が作者の唯一の意図をなかに納めている箱であるとするなら、テキストは、多層的、多元的意味の可能性を産み出す装置なのである」として、複数の読みの可能性を示唆するように、極言すれば、読者の数だけあるとも言える。しかし、テキストを分析する際に重要なのは、「単に作家の意図を気にしないことではなく、**客観的なものさし**によってテキストを分析して**論理的な読みとり**を行うこと」(松本 2016:4)である(強調は原著者)。またリーチ & ショートは、物語研究と、テキストの言語構造の考察とを関係づけることの有益性に言及し(2003:287)、小説の登場人物の動機や性格は、「行動・振る舞い・話し方などの外面的態度から推論される(ibid.:74)」としている。本小説の語り手が、平井(2017:82)が述べるような「[...] 強い自己防衛の本能から、歪曲され、隠蔽され、虚飾化され、巧妙な技巧を尽くした〈信頼できない語り〉」なのであれば、語り手が、自己防衛の手段の一つとして否定表現を選択することは、理にかなったものと言えよう。本稿では、小説の語りという外から確認できるテキストを、否定表現の特性という「客観的なものさし」によって分析し、否定を用いる語り手の動機や態度を確認する。

3. *The Remains of the Day* について

3. 1. 小説あらすじ

時は1956年。伝統と格式を重んじるイギリス貴族社会で執事として働くステイブンスは、アメリカ人である新しい主人との接し方に苦心している。そのような中、人知れず思いを寄せていたかつての女中頭ミス・ケントンを尋ねる——表向きは職務上の目的で——機会が訪れる。ステイブンスは6日間の旅の途中、訪れる先々で目にする風景の静謐な美しさに、イギリスの、そして執事の「偉大さ (greatness)」や「尊厳 (dignity)」を重ね合わせながら、自らの執事人生を振り返る。回想するのは、2つの大戦のはざま、かつて献身したダーリントン卿の屋敷であったダーリントン・ホールで開催された、国際政治に関わる2つの会合である。それぞれの会合の最中に、執事としての力量が試される出来事——執事として尊敬していた父親の死、そしてミス・ケントンの婚約の知らせ——が起こるが、ステイブンスは感情を表に出すことなく職務に徹するのである。回想するほどに懐古の念が増し、ついに旅の最終日には感情をあらわにする。しかしその後ステイブンスは、新しい主人との接し方について前向きな姿勢を見せ、回想の旅は終わりへと向かう。

3. 2. 社会文化的背景

言語使用には、その人が有している価値観が反映される。文化の構成概念を示したホフステード (1995:7-8) は、その中心にある価値観は、人が経験を重ねる社会環境の中にあるとした上で、価値観の象徴の1つが言語使用だと述べる。否定表現に反映される語り手の価値観を考察するにあたり、本節では、英国執事の務めと、家事使用人をとりまく社会変化について概観する。

3. 2. 1. 執事の務め

執事の任務は、男性使用人の長³として、家内のいかなる場面も滞りなくおさめることであり、そのためには「思慮分別こそが必須の要件」であるとともに、主人に献身できるよう独身であることが求められた (エヴァンズ 2012: 31-32)。執事は、主人の奇矯な振る舞いさえ受け入れ、威厳と慎みをもって任に当たったのである (ibid.: 37-38)。

3. 2. 2. 家事使用人をとりまく社会変化

英国貴族の家庭において15世紀頃までは、家事使用人も「家族 (ファミリー)」の一員とされていたが、18世紀が終わる頃には「家族」に含まれなくなる (村上 2012: 10-12)。そして、ヴィクトリア時代からエドワード時代における使用人の生活環境は、主人家族が暮らす階上の優雅な生活とは対照的に、総じて劣悪なものであった (エヴァンズ 2012: 274-275)。しかしこのような主従関係は、20世紀を迎えるころには変わってゆく。特に若い使用人たちは、命令や束縛を拒むようになり、自動車や電気製品などのテクノロジーの進歩は、必要な使用人の数を減少させたのである (エヴァンズ ibid.: 276-277)。そして第一

次世界大戦により、家事使用人の世界は一変し、一部の大邸宅をのぞき終焉を迎えることとなった (エヴァンズ ibid.: 278)。

3. 3. 社会変化への葛藤と適応

作者イングロは、主人公が執事であることについて、執事はイギリスらしさの典型であるとし、「[...] 自分の感情を押し殺して感情を表すのは悪だと考える人間を描くには、執事がぴったりだった」(和田 1990: 101-6) と述べている。つまり、本小説の語り手である執事の行動や言動は、英国執事のそれに限定されるものではなく、英国執事的な価値観を持つ人間の行動や言動とも言える。

また、小説内で回想される、第一次世界大戦から第二次世界大戦に至る時期は、まさに「[...] イギリスの覇権からアメリカの覇権へ、『パクス・ブリタニカ』から『パクス・アメリカーナ』へと移行するタイミングであった」(島村 2017: 40) のであり、「イングロの英国は国ではなくシステムである」(平井 2017: 80) とするならば、本小説内の執事は、過去を懐古しつつも社会変化に適応しようとする人間の象徴と捉えることも可能であろう。

このような社会変化の中にいる人間が、どのような考えで否定表現を用いるのかを考察するにあたり、次章では、否定の特性および機能を確認する。

4. 否定

否定は、言語を問わず人のコミュニケーション体系に存在し (Horn 2001: xiii)、社会の様々な場面で用いられている。しかし否定とは、非現実性に言及することであり、ホーン (2018: 259) が、「[...] 否定文は心理学的により困難でより多くの荷を負っており、認識論的にはより特定性がなく [...]」と述べるように、肯定に比べ理解処理コストがかかる言語使用である。しかし否定には、肯定とは異なる特性があり、これらの特性ゆえに、本章で確認する機能を担うことができるのである。

4. 1. 否定の特性——非対称性

ブラウン & レヴィンソン (2011: 375) は、肯定と否定の非対称性により生じる、対語における程度の差がFTA⁴を軽減するとし、肯定的な意味の語句を否定すると、それらの反意語となるが、否定的な意味の語句を否定しても、それらの反意語には至らないことを指摘する。同様に、Roitman (2017: 4) は、談話において、尺度的な語 (scalar words) の否定は、否定的評価の減衰 (attenuations) のために用いられるとして、以下の例文を挙げている。

- (1) His behaviour is not OK! (means 'terrible')
(彼の態度は大丈夫ではない!) (つまり「ひどい」) (筆者訳)
- (2) It wasn't my best choice! (means 'the worst choice')
(それは私の最善の選択ではなかった!) (つまり「最悪の選択」) (筆者訳)

4. 2. 否定の前提と想定

論理学における否定は「 $\sim\sim P = P$ 」と示され、命題 P を二度否定したものは命題 P であるとされるが、Givón (1978: 69-70) は、自然言語における肯定文と否定文の違いの基盤には「談話の前提 (DISCOURSE PRESUPPOSITIONS (原文大文字))」があり、この「談話の前提」が扱うのは、聞き手が信じているであろうと話者が想定していることだとする。また太田は、前提を「話者が聴者と共有していると思っている (あるいは仮定している) 背景的知识」であり (1980: 175)、談話に含まれるものだけではなく「ある文化、ある社会に属する人間が当然共有しているような知識もすべて含むものである」と述べる (ibid: 177)。例えば、話者が「このチョコレートは甘くありません」と言った場合、話者は、「聞き手は『一般的にチョコレートは甘い』と信じているであろう」と想定しているのである。否定文で否定されているのは、コンテキストに依拠しない命題ではなく、話者の想定であり、否定を理解するためには、前提が存在するテキストやコンテキストを参照することが必要である。すなわち、*The Remains of the Day* に表れる否定表現を理解するためには、それらに先行するテキストに加え、3.2. で確認した、作品世界に関わる社会文化的知識を参照することも必要なのである。

4. 3. 否定の機能

「同じ情報を、否定よりも情報伝達が容易な肯定で伝えることができるならば、あえて否定を用いる理由はない (Roitman 2017: 3) (筆者訳)」にもかかわらず、否定が自然言語において使用される理由は、肯定にはない否定の機能だと考えられる。本節では、否定の特性に起因する機能である否認、コントラスト、ヘッジングについて確認する。

4. 3. 1. 否認 (denial)

否認が否定の主な機能であることについて、Givón (1978: 103) は「[...] 否定は主に、相応する肯定が推定されるコンテキストの中で、聞き手が信じていると想定される内容を否認するために用いられる [...] (筆者訳)」と述べている。また Leech (1983: 101) は、否認の例として、“*Our cat is female.*” とは言わず、“*Our cat is not male.*” と言うことは、「私たちのネコはオスだ」と思っている誰かの間違っただけの肯定の内容を否認していると説明する。

以下、*The Remains of the Day* からの例である。(二重下線部：想定 of the root)

- (3) The staff plan would, furthermore, for each of the four resident employees mean a radical altering of our respective customary duties. The two young girls, I predicted, would not find such changes so difficult to accommodate,

(*The Remains of the Day*: 8)

この引用部分に至るまでに、語り手が、新しい主人であるアメリカ人ファラディ氏の指示を受け、最低限の使用人で家内を運営する効率重視の厳しい職務計画 (staff plan) を作成しな

ければならないことが述べられている。そして、二重下線部が示すように、その計画は、各使用人の業務に大幅な変化を生じさせるものである。そこで語り手は、「読者は、『使用人たちは、変化への対応を難しいと考える』と考えるであろう」と想定し、その想定を否定している。

- (4) Herr Bremann first visited Darlington Hall very shortly after the war while still in his officer's uniform, and it was evident to any observer that he and Lord Darlington had struck up a close friendship. This did not surprise me, since one could see at a glance that Herr Bremann was a gentleman of great decency.

(*The Remains of the Day*: 74)

戦後すぐに、ドイツ軍のブレマン将校がダーリントン卿の屋敷を初めて訪れた場面である。二重下線部に書かれた情報——ドイツ人を想起させる名前、戦後直後、軍服姿——から、語り手は、「読者は、『将校とダーリントン卿が友人になったことに私が驚いた』と考えるであろう」と想定し、その想定を否定している。

4. 3. 2. コントラスト (contrast)

コントラストとは、2つ以上のものを比較した際に認められる差異であり、またその差異を示すことでもある。そしてコントラストとして機能する否定について Labov (1972 : 381) は、「それら [否定文] は、起こり得たが起らなかった出来事とともに現れることで、実際に起こった出来事を評価する方法を提供する (筆者訳)」と述べる。また Yamada (2003 : 207) は、否定がコントラストとして機能する理由の一つとして、テキストやコンテキスト上の予想を覆すことを挙げている。

以下、*The Remains of the Day* からの例である。(二重下線部：想定根拠)

- (5) I decided the most prudent moment in the day would be as I served afternoon tea in the drawing room. Mr Farraday will usually have just returned from his short walk on the downs at that point, so he is rarely engrossed in his reading or writing as he tends to be in the evenings. [...] I did not take sufficient account of the fact that at that time of the day, what Mr Farraday enjoys is a conversation of a light-hearted, humorous sort.

(*The Remains of the Day*: 13)

新しい主人であるアメリカ人のファラディ氏から、自分の留守中に休暇を取るよう思いもよらない申し出を受けた語り手は、しばらく保留にした後、申し出を受けることを決め、話を持ち出すタイミングを二重下線部のように、念入りに検討する。しかし省略部分 ([...]) では、想定外の展開になったことに触れ、否定辞 not を含む後続部分でその原因を述べている。この例では、「読者は先行部の内容から、『語り手は、that 以下の事実についても十分に考慮し

平野： *The Remains of the Day* における否定のテキスト分析：語り手の内面を理解するために
た』と考えるであろう」という予測が否定により覆されている。二重下線部が示す「十分に考
慮した」という現実と、「十分に考慮しなかった」という非現実が対照されているのである。

また、コントラストとして機能する否定の構文に、not X but Y 構文がある。not X にお
ける X は、先行する内容、あるいは背景知識を含めたコンテキストから形成される何らか
の予想であり、それを否認で覆した上で、正しい情報 Y を提供し修正するのである。

以下、*The Remains of the Day* からの例である。

- (6) [...] I find that what really remains with me from this first day's travel is not
Salisbury Cathedral, nor any of the other charming sights of this city, but rather
that marvellous view encountered this morning of the rolling English countryside.
(*The Remains of the Day*: 28)

本引用の先行部で語り手は、ソールズベリーの美しい街並みから見えるソールズベリー
大聖堂の荘厳さ、そして夕日を背にそびえ立つその姿に言及している。このことから、読
者が予測すると想定されるのは、「初日で一番心に残っているのは大聖堂であり美しい街
並みである」という考えであり、語り手はそれを not および nor で覆し、続いて but 以下
で修正を行っている。

コントラストとして機能するメタ言語否定⁵の働きについて、ホーン (2018: 524) は、
「尺度述語に関する Q⁶に基づく含意を取り消す」と説明する。Q に基づく含意とは、「尺
度性を持つ表現の否定は、普通『～以下』という読みになる」(ホーン 2018: 491) という
ものである。したがって、その含意を取り消すということは、例えば、three, happy のよ
うな尺度語であれば、「～以下」ではなく、それを超えることを意味する。ホーンは次の例
文を挙げている (ibid.: 518-9)。

- (7) He doesn't have three children, he has four.
(彼は3人子供がいるのではない、4人だ)
(8) I'm not happy — I'm ecstatic.
(私は幸せなどではない、有頂天だ)

以下、*The Remains of the Day* からの例である。

- (9) As I remember, Giffen's appeared at the beginning of the twenties, and I am sure
I am not alone in closely associating its emergence with that change of mood
within our profession [...]
(*The Remains of the Day*: 141)

この not はメタ言語否定であり、alone という下限を規定する尺度性を持つ語を否定することで、「～以下」という読みとは対照的に、上限を含意すると考えられる。先行部でギフェン社の製品の品質の良さが示されていることから、「多くの人」が、ギフェン社製品の出現と当時の執事たちの気運の変化を結びつけると推定できる。

4. 3. 3. ヘッジング (hedging)

コミュニケーションで重要なのは、伝える内容だけではなく、伝え方を適切に選択することである。そしてヘッジングとは、円滑なコミュニケーションに関わるストラテジーの一つであり、Markkanen & Schröder (1997: 15) は、ヘッジングが緩和 (mitigation) あるいはポライトネス (politeness) などのコミュニケーション・ストラテジーとして扱われることを指摘している。また、ブラウン & レヴィンソン (2011: 199, 200) によれば、ヘッジングはフェイス保護のために、日常的な相互作用の脅威を緩和するのである。Markkanen & Schröder (1997: 8) は、ヘッジングは、相手のフェイスだけではなく、話者自身のフェイスも守るとし、ヘッジングを用いる動機について次のように述べている。

ヘッジを用いる動機として、例えば、後で間違いだと判明することへの懸念がある。不明確にすること、あるいは命題や主張の真理値に対する自身の義務を緩和することで、もしその内容が間違っていることが判明した場合、その主張は仮のもの、あるいは推量であったとすることができる。(筆者訳)

そして Leech (1983: 101-2) は、否定をヘッジングあるいは緩和のために用いる動機について、意見や態度を示す際のポライトネス、あるいは婉曲的に控えめであることを伝えるためとしている。

以下、*The Remains of the Day* からの例である。(二重下線部：想定 の 根拠)

- (10) This was a most embarrassing situation, one in which Lord Darlington would never have placed an employee. But then I do not mean to imply anything derogatory about Mr Farraday; he is, after all, an American gentleman and his ways are often very different.

(*The Remains of the Day*: 14)

本引用の先行部で語り手は、主人であるファラディ氏に旅の目的を説明しようとして、迂闊にも元女中頭であるミス・ケントンの名前を出してしまい、ファラディ氏に大いにかからかわれる。二重下線部の「元主人の英国貴族ダーリントン卿であればこのようなことはしない」という語りは、ファラディ氏に対する非難と受け取られる可能性があり、ファラディ氏のフェイスと同時に、主人に献身すべき執事たる自分のフェイスも脅かすことになる。それを避けるためにここでは、両者のフェイスを守るストラテジーとして、否定によ

平野： *The Remains of the Day* における否定のテキスト分析：語り手の内面を理解するために
 るヘッジングを行っていると考えられる。

また、ヘッジングとして機能する if 構文についてブラウン & レヴィンソン (ibid.: 237) は、if 節で、主節の行為の理由を示し、理由と行為の関連をほのめかすことで、主節の行為が和らぐとしている。

- (11) If you'll allow me, I declare the meeting adjourned.
 (もしお許しいただければ、休会を宣言いたします)

以下、*The Remains of the Day* からの例である。

- (12) I also spent many minutes examining the road atlas, and perusing also the relevant volumes of Mrs Jane Symons's *The Wonder of England*. If you are not familiar with Mrs Symons's books [...] I heartily recommend them.
 (*The Remains of the Day*: 11)

サイモンズ夫人による当シリーズの出版は 1930 年代ということで、語り手は「読者は馴染みがない」と想定していると考えられる。この条件構文の主節動詞 recommend は、ともすれば押し付けがましい印象になりかねない。そこで語り手は if 節で、recommend という行為の理由を示し、読者に与え得る負荷を緩和している。加えて、not familiar については、直接的に反意語の ignorant などではなく、familiar という肯定的な語を否定することで、婉曲さを出している。

5. 考察

5. 1. 語りの内容と機能ごとの否定表現

The Remains of the Day の語りから否定表現を抽出した結果、本稿の分析対象である、not と never による述語否定かつ社会文化的背景に関わるものは、全部で 88 件確認された。表 1 は、主題ごとに大別した語りの内容と、機能による分類である。

表 1 語りの内容・機能別 否定表現の数

否定の機能	語りの内容					合計
	執事の職務	英米の違い	社会変化	ダーリントン卿	英国	
否認	29	13	12	10	4	68
コントラスト	3	2	3	1	2	11
ヘッジング	4	1	1	1	2	9
合計	36	16	16	12	8	88

Givón (1978:103) が否定の主な機能は否認であると述べるように、88 件のうち、否認と判断されるものが 68 件で、全体の約 77% を占めた。そしてその約 33% に相当する 29 件が執事の職務に関するものであった。表 2 は、その否認の想定を、肯定的か否定的かにより区別したものである。

表 2 否認の想定：執事に対する評価による区別

	肯定的評価	否定的評価
否認の想定	1. 執事は何事にも対応する 2. 主人の指示通りに働く 3. 主人を満足させるべき 4. 様々な特権がある 5. 自分(語り手)の洒落の受けが良かったなど	1. 主人の不満足を考えなくなる 2. 執事はみな出世ばかり考えている 3. 執事の表層的技量が本質である 4. 感情的になることもある 5. 外的な事柄で動揺するなど

表内の肯定的な想定は、完璧な執事像であり、これらを自ら否認する態度に、語り手の、執事としては見せない人間らしさを伺うことができる。一方、否定的評価の想定は、執事の職務に対する語り手の強い自負を伝えている。

否定の理解については、Clark が、否定文が容易に理解されるのは、その想定が当該の文脈内で妥当な場合である(1974:1333) とするように、読者がテキスト内の否定を理解するためには、否認されている想定が読者にとって妥当であり、何らかの形で示されている必要がある。88 件のうち、その根拠がテキストの先行部に示されているものは 58 件であった。30 件については、先行部に明示されていないものの、語り手と読者の間で共有されているであろう社会文化的背景が、その根拠として参照されると思われる。例えば、戦争の傷跡や市民の政治に対する意識変化といった英国事情、あるいは、大邸宅のありようや貴族の使用人に対する振る舞いといった貴族社会一般に関するものなどである。

5. 2. コントラストによる強調

否認と比較すると数は少ないものの、語り手の態度を明確に表すコントラストとしての否定が、11 件確認された。表 3 は、コントラストとしての否定が強調している事物を示している。

表 3 コントラストによる強調

否定の機能	主 題				
	執事の職務	英米の違い	社会変化	ダーリントン卿	英国
コントラスト	執事たる自負	譲渡完了後も米国に滞在	以前の執事に対する肯定的評価	ダーリントン卿を非難する人々への批判	英国の美しい田園風景
	執事の寡黙な振舞	米国の冗談の下品さ	現在の従者への批判		英国の美点としての素朴さ
	洒落の危険性		銀磨きに対する認識の変化		

平野： *The Remains of the Day* における否定のテキスト分析：語り手の内面を理解するために

執事である語り手には、思慮深く控えめな振る舞いが求められる。そのような語り手が、自らの職務についての自負、あるいは米国流の冗談の下品さを声高に強調するとは考えにくい。語り手は、表3に示されたこれらの態度をあからさまではなく、〈notによる非現実〉と〈現実〉、あるいは〈条件構文による非現実〉と〈現実〉を対照することで、読者に伝えているのである。

5. 3. ヘッジングによるフェイス保護

抽出した否定のうち、ヘッジング機能を担っていると判断できるものは9件であった。コントラストとしての否定同様、数は限られているものの、ヘッジングとしての否定の考察を通して、コントラストを用いた語り手とは異なる姿が確認された。

表4 ヘッジングによるフェイス保護

否定の機能	主 題				
	執事の職務	英米の違い	社会変化	ダーリントン卿	英国
ヘッジング	否定的評価〈自身が作成した職務計画が悪い〉を否定 (実は肯定的評価をしていると思われる)	否定的に評価され得る自分の行為〈米国人主人を批判する〉を否定	否定的に評価され得る自分の行為〈他の執事の能力を疑う〉を否定	否定的に評価され得る自分の行為〈元主人の発言内容の重要性を否定する〉を否定	・条件構文での行為のFTAを緩和 ・肯定的な語の否定で婉曲に
	否定的評価〈計画に余裕を持たせることに注意を払わなかった〉を否定 (実は肯定的評価をしていると思われる)				・肯定的な語の否定で婉曲に ・助動詞 may で断定を避ける
	肯定的評価〈会合を成功させた功績〉を否定				
	否定的評価〈昔の栄光を振り返り満足感にひたるのは愚かしい〉を否定 (実は肯定的評価をしていると思われる)				

執事の職務についてのヘッジングでは、語り手自身が実は肯定的評価をしている事物について、否定的評価を否定することで、肯定的評価を明言した場合に読者に与える負荷を軽減している。自身の仕事ぶりを自慢したい気持ちを抑えながらもほのめかす、語り手の正直さがヘッジングから伺える。英米の違い、社会変化、ダーリントン卿について今回確認されたヘッジングでは、執事として自分がすべきではないと思われる行為を否定するこ

とで、自身のフェイスを守ることに重きが置かれている。対照的に、英国に関するヘッジングは、読者に直接向けられており、肯定的な語を否定するなどのストラテジーを用いて、語りが読者に与える得る負荷を軽減している。

6. 結論

本稿では、小説 *The Remains of the Day* の語りにおける否定を考察することで、語り手の考えあるいは態度を明らかにすることを試みた。人のコミュニケーション同様、テキストを理解するためには、その言語的側面と、作品世界の社会文化的背景の両方を考慮する必要がある。否定は、その語用論的特性がゆえに、相手はこう考えているであろうという想定を否認し、否認することでコントラストを際立たせ、ヘッジングによって発話あるいは語りを婉曲なものにする。本小説の語り手は、変化の著しい社会の中で、身に付いている価値観と新しい価値観の間で葛藤する一人の人間である。しかし、執事という職業柄、自身の複雑な思いをあからさまには語ることはない。考察の結果、職業に対する誇り、社会変化への不満、元主人への思慕、功績を自慢したい気持ちなどの内なる思いを、否定というストラテジーで強調し、そしてほのめかす、語り手の態度が確認された。

7. 今後の課題

本稿では分析対象を、*The Remains of the Day* の語りに表れる、not と never による述語否定に限定したが、自然言語における否定はその限りではない。例えば、本小説内にも数多く確認された、un- や in- などの否定接辞が付与された形容詞にも、発話を婉曲にする機能がある。今後は、否定接辞の分析からも、登場人物の内面を探りたい。

注

- 1 長崎市出身のイギリス人小説家カズオ・イシグロは、三作目となる本作で、1989年にブッカー賞を受賞。2017年にはノーベル文学賞を受賞している。
- 2 動詞を含み、主語について何かを述べ、文あるいは節の一部である、述語 (predicate) を否定するもの。
- 3 執事の上に、最上級の使用人である「家令」が置かれていない場合。
- 4 face-threatening act (フェイス威嚇行為) の略称。フェイス (face) とは、ブラウン & レヴィンソンのポライトネス理論における中心的抽象概念であり、「自らの行為を妨げられたくないという欲求 (ネガティブ・フェイス)」と、「(何らかの点で) 認められたいという欲求 (ポジティブ・フェイス)」からなる。これらのフェイスを脅かす行為がFTAである。
- 5 命題を否定する「記述否定」とは異なり、先行発話のあらゆる側面 (慣習含意や会話の含意、形態、文体など) において、先行発話を否定する。
- 6 Qとは量 (Quantity) である。Grice (1989) の会話のやり取りに関する「協調の原理」の下位項目 (質、量、関係、様態) を、ホーンが2つに統合したその1つ、Q原理に関わる。Q原理は、下限規定

平野： *The Remains of the Day* における否定のテキスト分析：語り手の内面を理解するために (some や warm など) の法則であるが、上限規定の含意 (some に対して not all、warm に対して not hot) を産み出すことができる (ホーン 2018：249)。

引用文献

- ブラウン, ペネロピ・レヴィンソン, スティーヴン C. (2011). 『ポライトネス——言語使用における、ある普遍現象』田中典子 (監訳) 東京：研究社.
- Clark, H. H. (1974). Semantics and comprehension. In T. A. Sebeok (ed.), *Current trends in linguistics: Linguistics and adjacent arts and sciences* Vol. 12, 1291-1428. The Hague: Mouton. Retrieved September 18, 2021, from https://web.stanford.edu/~clark/1970s/Clark,%20H.H.%20Semantics%20and%20Comprehension_%201974.pdf
- エヴァンズ, シャーン (2012). 『メイドと執事の文化史——英国家事使用人たちの日常』村上リコ (訳) 東京：原書房.
- Givón, Talmy (1978). Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology. In: Cole P. (eds), *Syntax and Semantics*. Vol. 9, 69-112. New York: Academic Press.
- Grice, Paul H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- 平井杏子 (2017). 『[新版] カズオ・イシグロ——境界のない世界』東京：水声社.
- ホフステード, ヘルルト (1995). 『多文化世界——違いを学び共存への道を探る』岩井紀子・岩井八郎 (訳) 東京：有斐閣.
- Horn, Laurence R. (2001). *A Natural History of Negation*. Stanford: CSLI Publications.
- ホーン, ローレンス R. (2018). 『否定の博物誌』河上誓作 (監訳), 濱本秀樹ほか (訳) 東京：ひつじ書房.
- Ishiguro, Kazuo (1989, 2005). *The Remains of the Day*. London: Faber and Faber.
- Labov, William (1972, 1986). *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Leech, Geoffrey N. (1983). *Principles of Pragmatics*. London and New York: Longman.
- リーチ, ジェフリー N・ショート, マイケル H. (2003). 『小説の文体——英米小説への言語学的アプローチ』筧壽雄 (監修), 石川慎一郎ほか (訳) 東京：研究社.
- Markkanen, Raija, & Hartmut Schröder (1997). Hedging: A Challenge for Pragmatics and Discourse Analysis. In: Markkanen, Raija, & Hartmut Schröder (eds), *Hedging and Discourse: Approaches to the Analysis of a Pragmatic Phenomenon in Academic Texts*. 3-18. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- 松本和也 (編) (2016). 『テキスト分析入門——小説を分析的に読むための実践ガイド』東京：ひつじ書房.
- 村上リコ (2012). 『英国執事——貴族をささえる執事の素顔』東京：河出書房新社.
- 太田朗 (1980). 『否定の意味』東京：大修館書店.
- Roitman, Malin (2017). Introduction. In: Roitman, Malin (ed.), *The Pragmatics of Negation: Negative Meanings, Uses and Discursive Functions*. 1-14. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 島村直幸 (2017). “英米の「特別な関係」の形成 - 1939-1945年 (上)” 『杏林社会科学研究』第33巻1号 37-60. Retrieved September 21, 2021, from <https://v3opac2.kyorin-u.ac.jp/webopac/TC10161487>
- サザーランド, ジョン (2020). 『若い読者のための文学史』河合祥一郎 (訳) 東京：すばる舎.

- 土田知則・青柳悦子・伊藤直哉(1996).『現代文学理論——テキスト・読み・世界』東京：新曜社.
- 和田俊(1990).“英ブッカー賞受賞作家 ルーツをたどる長崎への旅 カズオ・イシグロを読む”『朝日ジャーナル』01月12日号 101-106.
- Yamada, Masamichi (2003). *The Pragmatics of Negation-Its Functions in Narrative*. Tokyo: Hituzi Syobo.